死亡確定のユージオくんになったので取り敢えず剣術を極めてみた

鬼城

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

クラスメイトである女子生徒を助けた結果死んでしまった主人公は生と死の狭間で死神に会う。

何故か魂が美味しくないという理由だけで魂だけ生きることに！

そんなこんなでユージオくんに憑依してしまった主人公が死なないように頑張る話。

目次

プロローグ ―― 1
ビギニング
1話　剣士だと思っていた自分を殴りたい ―― 12
2話　ベルクーリと北の白い竜 23
3話　論破の冒険 ―― 35
4話　洞窟ってこんなに近かったんだね ―― 46
5話　洞窟にあるもの ―― 58
6話　変えられない運命 ―― 72
7話　決して破れないもの ―― 82

プロローグ

「ねえ、聞いてよぉ～。私の好きなキャラクターだったユージオが死んじゃったんだよぉ！」

そんな情けない声を出しながら女子生徒はクラスメイトである男子生徒に訴える。当の男子生徒は興味なさそうにヘッドホンをしながら寝ている。それでも、女子生徒はしつこく話し掛けた。

「うぅ～、最悪だよぉ。…って聞いてる？」

ようやく、女子生徒は男子生徒が聞いてないことに気付いたようだ。そして、女子生徒は机に伏せている男子生徒の頭を叩いた。バシッという音が教室に響く。

「いてっ…」

「聞け！」

「聞いてたよ。ユージオ君が死んだんだろ？それはそれはカワイソウニ。」

「朔弥…とりあえず死のうか。」

「なんで!?」

朔弥と呼ばれた男子生徒が今度は情けない声を出し、驚く。何故『死ね』と言われた

のか分からないというように。
「なんで、ユージオの格好良さが分からないかなぁ。」
「いや、別に分からない訳では無いよ？っていうより僕はあまりＳＡＯについてあまり知らないからなぁ。それに、普通そういうのって主人公好きになるもんじゃないの？」
「キリトくん？うーん、キリトくんもいいけどやっぱり、一番はユージオかなぁ。」
「ふーん、で、その結由の大好きなユージオ君が死んだと？」
　その言葉にまたユージオが死んだことを思い出したのか少し涙目になる結由と呼ばれた女子生徒。大袈裟なーーと思うかもしれないが、結由はＳＡＯだけはとっても好きな女の子である。なので、しょうがないと言ったらしょうがない。
「うぅ～、だから母さんに学校行かないって、言ったらなに馬鹿なことを言ってんだ、早く学校いけって…」
「いや、それ当たり前だから。」
「折角、ユージオくんのお墓でも作ってお供えしておこうって思ってたのに…」
「いやいや、ユージオくんどんだけ現実で大切にされてんの!?ユージオくんも現実にお墓作られるって考えたこともないと思うけどね!?」
「だから、早退するね。」
「おい!?今、放課後だから！早退とかないから！っていうよりそれ、下校だから！」

そんな朔弥の声を無視して結由はとぼとぼと歩いていく。その足取りは重く前も見ていないのでいつか誰かにぶつかって謝ることになるだろう。

「はぁ、しょうがない。僕も帰ろうか。」

一つため息をついた朔弥は急いで鞄に教科書などをつめて帰る支度をし夕日の差す教室から出た。

結由は歩きが遅いからすぐ追いつくだろうと考え、普通に歩いて校門までいく朔弥。靴箱までくると校門より五メートル前にいる結由を見つけ走る。結由の足取りはまだ重かった。

結由が校門をでるまで後三メートルーー

朔弥が結由に追いつくまであと八メートルーー

結由が校門をでるまで後二メートルーー

朔弥が結由に追いつくまであと三メートルーー

そしてーー

結由が校門を出た時、一台の車が暴走しているのか丁度結由の方へものすごい速度で迫っている。

あとーーーーー二メートル。

「結由ー！」
「え？」
　異変に気付き、朔弥は結由の名前を叫びながら走る速度をさらに上げる。朔弥が校門を出た時、既に車と結由の距離は1メートル程。それでも、朔弥は諦めじと結由の背中を押すように手を伸ばす。
　ドンーーッ鈍い音が響く。その音とともに朔弥は自分は死んでしまうのだと確信した。
「さく…や？朔弥！ねぇ！」
　耳元で結由の泣き叫ぶ声が聞こえてくる。それに答えようとしても朔弥の口は動かない。だから彼は笑う、どうせなら笑って終わりたいと願う。
「なんで…笑うの？へんなの…」
　そして、彼女も笑う。その笑顔をみてから朔弥は永遠に意識を失った。

◆◇◇◆◇◆

　ーーアンダワールド。
《高適応性人工知能》を開発するために創られてた世界。今ある現代のＡＩの遙か上を

行くその高適応性人工知能（AI）は人間と同じように魂をもっているといっても過言ではない。またの名を人工フラクトライト。彼らＡＩは自ら建物や法律、都市をつくりアンダワールドを完成させた。それは完全な理想社会（ユートピア）で、その名の通り平和な社会。だからこそ、それは問題となった。何故ならアンダワールドが創られ《高適応性人工知能》が開発された目的は簡単に言うと戦争で敵兵を殺すためなのだから。

曰くそれは、自律型無人兵器といわれるもの。人間が使う戦闘機を肉体のないＡＩが操縦し自律的に動かす。そして、人間のパイロットが操る戦闘機をドッグファイトで撃墜し得るレベルを目指す。もはや、人間と殆ど同じそのＡＩならそれが可能となる訳だ。それが実用化されれば自衛隊といった人の命が亡くなることは減り、戦争に行く人は大助かりとなる。ならばーー

『人工知能たちの権利』

はどうなるのだろうか。

答えはどうにもならないというのが妥当だろう。彼らと人間の違いは肉体があるかないかが大きい所で、つまりそれは人の命に比べれば軽いという意味でもある。ＡＩは所詮ＡＩで開発を行っているＲＡＴＨ《ラース》にとって目的のための道具にすぎない。

だが、彼らＡＩも生きている。人間の赤ちゃんの魂をコピーしてそこからつくられた彼らだとしても人間と同等な思考能力がある。結局、どう思うかは人の価値観次第なの

だろう。

そして最後に、人工知能が過ごす世界アンダワールド。その中に、《アリス》という名前の人工フラクトライトがいる。それこそ、《ラース》か求めていた人工高適応型知的自律存在、アーティフィシャル・レイビル・インテリジェント・サイバネーテッド・イグジスタンス。通称《A．L．I．C．E．》。このアリス化こそ《ラース》のプロジェクトでこう言われる。

ープロジェクト・アリシゼーション、とー。

◆◇◇◆◇◆

そこは真っ白な空間、そこで彼ー朔弥は目覚めた。そして、働かない頭を無理やり働かせ徐々に覚醒する。

「…っ、此処どこ？」

どうにか出せた声でそう呟く。そして、その声に答える声は横から聞こえた。

「ここはね、死と生の狭間だよ♪」

楽しそうにそういった声の主。その声がする方をバッと向いた朔弥は絶句した。あり得ないものを見るように。否、見たのであろう。

「あっれー？反応なし？」
「……はっ！あれ？え？」
「おやおや？混乱しているようだね。」
「いや、混乱しない方がおかしいでしょ!?だって、その格好ーー。」
　そう、彼が驚いたのは、声の主の格好にあった。大きな鎌に黒色のボロい服。その姿は誰もが知る『死神』のそれだった。朔弥が絶句した理由としては、本当に死神がいるのか。というものからだろう。
「そうだよー、僕、死神なんだよねー。忙しんだよねー。だから、もう始めるよ」
「何言ってーー」
「君の魂はまだまだ、熟してなくて美味しくないんだよね。だから、魂をもっと美味しくするためもう一度生きてね。あっ、でも肉体は死んでるから魂だけね。」
「は？ちょっとーー」
　質問などなしに問答無用でその死神は説明をする。朔弥にとって迷惑極まりない。それに、死神は朔弥を生かすと言ったのだ、それも魂だけ。それが、どういうことなのか分かるわけがない。
「君がもう一度死んだ時もう一回魂もらいに来るから、よろしくね☆」
「質問させーー」

「それじゃあ、頑張！」
その死神の言葉の後、朔弥の意識は暗転した。

もう一度目が覚めた朔弥は違和感に襲われた。それは、身体が思うように動かせないという感覚と喋ることができないというもの。どうにか動かせた手はあまりにも小さい。つまりーー朔弥は赤ちゃんになっていた。
（え？本当に生き返ったの？）
生き返ったという表現とは少し違う気がするが…そんなことを考える暇もない。そんなことを考えるのならまず、この状況を理解するべきだ。
そして、朔弥は目だけで周りを確認する。首はうまく動かせないためまだ、首がすわっていないということだろう。
「あら？目が覚めたの？ユージオ」
不意に声が聞こえた。女の人の声。考えられるのは、母親ということだ。そして、その母親らしき声は朔弥のことをユージオと呼ぶ。
（ユージオ？それって…）
結由の大好きなユージオくんのことである。ということをまだ彼は気づかない。

ユージオと言われただけでここがアンダワールドだと理解出来る人などいない。それを理解するということは、小説の中にいるっということを認めるということである。朔弥にはそんな事実を認めるだけのメンタルはない。

（ユージオか…。結由の好きなキャラクターと同じ名前だな。）

もう一度言っておこう。

ユージオと結由の好きなキャラクターは同一人物であるとーー。

そして、そんな事実に朔弥（ユージオ）が気付くのはもう少しあとであるとも付け足しておこう。

◆◇◇◆◇◆

アンダワールドにあるノーランガルス北帝国の更に北部辺境に位置するルーリッドの村。

そこにユージオ（朔弥）は生まれた。それから三年たち（3歳）やっとユージオはここが物語のなかであり、結由の好きなキャラクターに憑依?してしまったのだと気付いたのだが、その時のショックのようなものが大きかったのは言うまでもない。そして、同時に気付いたのがーー。

これって、すでに若くして死ぬの確定じゃない？という事実。

ＳＡＯについて知らない彼だが結由が結構前にユージオとキリトが剣士になるべくザッカリアに向かったとかいう話をしていたことがあったので、ユージオが死んだのは剣での戦いで敗れたからだろうと考え取り敢えず、剣術を極めてみようと考えた。

それが３歳。そして、今は１０歳。剣術を磨こうにも剣がなければいけないわけなのだが、そんなものあるわけもないので剣の変わりとして木の棒を使う。毎朝、両親の目を盗んでは素振りを２００回し、家の中では筋トレをする。それは全て早くに死にたくないという気持ちによるもの。

「…九十九……百！」

そして、今日もそれは続く。最近は腹筋や腕立てが百回もできるようになってきているユージオは既に普通の子供だとは思えない。

「うーん、もう少し回数ふやすかな？」

物足りなかったのかユージオは一人そう呟く。その言葉を聞いていたユージオの幼馴染であるキリトは苦笑した。

「そんなにやって何になりたいんだよ」

「あはは」

「天職で剣士になれるわけではないだろ？」

「でも、どの天職でも体力はいるしね。」
　そして、ユージオも苦笑する。家に遊びに来ているキリトには申し訳ないがユージオとしても筋トレを怠るわけにはいかないのでしょうがないのだ。
「そりゃ、そうだけど…。アレは明日で決まるわけだろ?」
　キリトの言うアレとは天職のことである。十歳になると誰もが村の一員として天職が与えられる。それは、衛兵だったり剣士だったりと様々。そして、キリトとユージオは十歳になっているため明日、天職が与えられるのだ。
「キリトは何がいいの?」
「やっぱ、剣士かなぁ」
「まぁ、明日のお楽しみだよね」
「そうだな」
　明日のお楽しみと言っているユージオだが『剣士』であるということが分かっている（何故なら剣士としてザッカリアへ行くと知っているから）ので明日に対して特に気にしてないのが見て取れる。だが、彼はまだしらない。天職が剣士ではなく『巨樹の刻み手』でありいわゆる樵であるということを…。

ビギニング

1話　剣士だと思っていた自分を殴りたい

ギガスシダー、《巨神の大杉》を意味するそれはその名の通り、幹の直径が4メル（ここではメートルをメルというらしい）天辺の枝までゆうに70メルはある。つまりは化け物だ。

その、ギガスシダーは此処《ルーリッドの村》が拓かれる前から根を張っている。その巨大さ故に絶大な生命力ーーそれにより、周囲から陽神と地神の恵みを奪い去ってしまう。大樹の影が届く全ての土地では、種をまいてもいかなる作物も実らない。

ならば開拓をするためにはその邪魔なデカ物をどうすれば良いのか？簡単な話だ。火にかけたり、掘り起こしたり、切ってしまえば良いのだ。とは言うものの、大樹の木質は鉄の硬さを誇り、火にかけても煙すらでず、ましてや地中深くまで根づいている根を掘り起こそうなど論外。だからこそ、彼らは古くから《竜骨の斧》と言われる鉄さえ断てる斧を使い樹の幹を刻んできた。

そして、その役目をまた次の世代に伝えていき、時は流れ約300年。その役目こそ天職《巨樹の刻み手》である。

そんな長い長い歴史のある木は今も彼らの頭上に沢山の葉を広げ陽神ソルスによる光を遮っている。そして…彼らは斧を持って立ち上がり沢山の葉の下でーーいつもと同じように高く澄んだ音を鳴らした。

◆◇◆◇◇◆

どういうことなんだ?

これこそ、彼が抱いた感想だろう。自分が思っていたのとは違うーーそのため、戸惑いは大きい。

『キリト、ユージオ。そなたらの天職は巨樹の刻み手だ』

「……え?」

その言葉はユージオを震わせた。

当然だ、勝手に剣士であると考えていたのはユージオ自身である。それが外れていたのだから、戸惑いは絶大だ。そして、ついに出た声はとても情けなかった。

「どうした?ユージオ」

「……なんでも、ありません」

ここで、なんで剣士じゃないんだ!と言える訳でもなく下を向いて黙るユージオ。そ

の様子を首を傾げながらキリトは見る。そんな二人をコホンという咳払いが同じ方向を向かせた。二人の視線が咳払いをした張本人村長へと注がれ、それを確認した村長は長い長い物語を語り始める。それすらも、ユージオは耳に入ってこなかった。まるで、魂がないかの様にボーッと突っ立っている。

「聞いておるのか！ユージオ！」

「えっ？あー、はい。大丈夫です」

　ギガスシダーはどうのうこうのと話していた村長がユージオの異変に気付き、声をかける。それによって、やっとのことで現実へと引き戻されたユージオだったのだがよほどショックだったのか今度は頭を押さえる。コラコラユージオ君、人の話は聞かなくちゃ！という気にもなりはするが…まぁ、放っておくことをみなさんにオススメしておこう。

「ギガスシダーを倒すことは先代からの悲願なのだ。だからーー」

　ダラダラとギガスシダーについてまたもや語り始めた村長。それをじっくり聞いて終わったのはすでに日が沈む時間。

　やっとのことで解放されたキリトとユージオは少しでも筋肉をほぐそうと背伸びをする。

「…長かった…」

「そう言うなよ…ユージオ。でも、まさか木こりだとはなー」
「あはは…そうだね…」
乾いた笑いをするユージオ。
それにキリトもつられて笑みを零す。
「俺としてはやっぱり剣士が良かったんだけどなー」
「…うっ」
「ど、どうした!?ユージオ?」
剣士が良かったんだけどなという言葉に先程のことを思い出してかユージオは顔を赤くする。流石に勘違いしていたこともあって恥ずかしいんだろう。
「明日からか…ユージオ早く起きろよ?」
「……それ、キリトの方が心配でしょ?」
「ははっ、違いない」
そんな他愛もない会話をしながら家へ帰る。
とーー、そんな時不意に後ろからユージオ達を呼ぶ声がした。その声に二人してあぁ、あいつかーーと予想する。その予想はーー。
「ユージオ!キリト!」
「……アリス。どうしたの?」

あっていたようだ。
金髪で蒼色の瞳をした少女ーーアリス・ツーベルクは息を切らしながらもユージオとキリトの肩に手を置く。
「…？」
「剣士じゃなかったみたいね？…まぁ、木こりでも頑張って！」
「…ぐはっ！」
ユージオは死んだ。
（何なんだ!?今日は、よく精神攻撃をくらうんだけど!?）
またもや落ち込んだユージオをキリトは心配そうに眺める。そして、悟る。あぁ、剣士じゃなかった落ち込み度は自分ではなくユージオのほうが大きいのかもしれない、とーー。
「で？アリスは応援のためだけに走って来たのか？」
「ん？そうよ。だって明日から私があなたたちのお昼ご飯持っていかないといけないんだもの」
「…うそ、だろ？」
「なによキリト。何か言いたそうな顔をしてるじゃない」
「…アリスが作るわけではないですよね？」

何故か敬語になるキリト。怯えたようにアリスを見ているその様子は大型動物に襲われているリスのようだ。

そして、アリスはニコリと笑った。その笑顔は天使にも負けじと劣らない素晴らしいものだった。その瞬間二人にゾクリと悪寒が走ったのは言うまでもない。

「…さぁ、どうかしら？」

「(聞いたか、ユージオ！やばいことになりそうだぞ！)」

「(僕たち死ぬのかな…毎回、ご飯の時になったら逃げなきゃいけないのかな…)」

コソコソと二人して話す。アリスが作るとなるならばそれだけは阻止しなくてはならないとーー。

最近のことだ。アリスが作った料理を食べたのは…あの時は死んだ。二人して机に伏せた。それほどまでに彼女の料理はヤバいのだ。

「二人とも…死ぬ？」

「ギクゥ…いやいや、楽しみだねってキリトと話してたんだよ！」

「そ、そうだぞ」

アリスから向けられた冷たい視線を何とか我慢しながらもそう誤魔化す。そして、逃げるように急いで帰るのだった。

◆◇◆◇◇◆

重い…

竜骨の斧を持ってそう感じたユージオは同時に不安を感じた。

こんな重い斧を何回も振ることができるのだろうかとーー。そう感じたのはキリトも同じようで苦笑いをしている。

「僕、初めてガリッタ爺さんは凄いと感じたよ…」

「あぁ、俺もだ」

ガリッタ爺さん。ユージオとキリトの前の巨樹の刻み手である。ガリッタ爺さんは斧を何回振っても疲れた素振りは見せない。そんなガリッタ爺さんをユージオ達はギガスシダー以上のバケモノだと感じていた。

「なにを言っておる。早よ振れ」

「は、はい」

「ユージオ頑張れーー!」

キリトの声援を受け流しながらユージオは目の前にあるバケモノーーギガスシダーを見つめる。ユージオの目の前には1メルほどの切り込みがあり昔の人達の頑張りが見られた。

その切り込みに向かって斧を振る。とーー、手を大きな痺れが襲う。そしてあぁ、また失敗かーーと、ユージオは不安気にガリッタ爺さんを見た。
「…まだまだだ」
「はい…精進します」
そして次は、キリトがギガスシダーに向かって斧を振る。
やはりそれも鈍い音が響き、失敗したことを意味していた。思った以上に難しいなという顔を浮かべてキリトは自身の手を眺めている。ユージオと同じくその手は痺れているのだろう。
「二人ともいいか?木こりは難しいんだ。儂も最初から出来ていたわけではない。体重移動や呼吸、拍子、速度それらを完璧に制御して全ての威力をぶつける。お前らはそれが出来ておらん」
「……」
事実なので口答えなど出来るわけではなくユージオは悔しそうに下を向く…わけではなくただ単にこう言いたいだけだ。
ーーまだ、数日しか経ってないのに10歳の子供が出来るわけないだろ?と。
そんなユージオの思いをガリッタ爺さんが気付くはずはなくガリッタ爺さんはユージオを励ますように肩に手を置いた。

「……いつか出来るようになる」
「…そ、そうですね」
名一杯の励ましの言葉。それすらもユージオは心広く受け止めることができなかった。それでもユージオは優しい心の持ち主である。悪な気持ちは心にしまってなんとか作り笑顔を向ける。
「今日はここまでだ。明日からはお前たちだけでがんばるのだぞ？僊は言うことは全て言ったので」
「えぇ、この天職名一杯やらせて貰います」
「ふっ、キリトなに？その言い方」
「ユージオくんダメだねぇ。歳上の方には敬語をつかうものなのだよ？君も見習いたまえ」
「ははっ、なんかムカつくなぁ」
今日も今日とてユージオとキリトは仲良く会話を開始した。

ーー人界暦三七二年七月ーー
天職を貰って２度目の夏。
太陽神ならぬ陽神であるソルスは今も尚、熱と光を発している。

それでも、その陽神の恵みは届かずユージオとキリトの目の前で遮られている。
「それにしてもユージオはすごいよなぁ」
「どうしてだい？キリトもかなり…というか意外性があってある意味すごいと思うけどね」
「それは嫌味かい？ユージオくん」
「そんな馬鹿な……それで？どうして僕をすごいと？」
「だって５０回ぐらいなら余裕で振ってるだろ？」
「まぁ、鍛えてるからね」
剣士になれなかったのは残念であるがそれでも長年やっている腹筋などの筋トレをやめるのも惜しく続けているユージオ。
だからなのかは知らないがキリトよりかは斧を長く振ることが出来ていた。
「じゃあ、今日もキリトの奢りかい？」
「んな馬鹿な。まだまだやれるさ」
そう言って立ち上がったキリトは真剣そのものだ。
そんなキリトを横にユージオはシラル水♪とウキウキだ。最近ではシラル水を賭けて５０回叩く中で何回いい音（ギガスシダーの心中を捉えているか）するかを勝負している二人である。

そして、キリトの叩く音を聞きながらユージオは空を見上げーー

「今日もいい天気だ」

と呟いた。

◆◇◆◇◇◆

そろそろお昼頃だ。

アリスは二人のお弁当を作るべく台所に立つ。今日はサンドウィッチにしようかそれともおにぎりか…と悩みに悩みパイを作ることに決めた。

「さてさて、やるわよー！」

そう意気込んでみてもやはり一人でやるのは不安がある。もう2年ぐらいは経つというのに料理は難しいものだ。

いっそ、神聖術で作れないのか？なんて変なことを考えながら準備に取り掛かる。

そして、今日はーー。

さてさて、今日もまたユージオとキリトの弁当が完成した。

2話　ベルクーリと北の白い竜

あー、暑い。
そんな事を考えながらユージオは斧を振る。もうすぐ正午になるというのに午前中の分の仕事が終わらない。
それでもなんとかヤル気を振り絞り斧を振る。
「よんじゅう…はち！…よんじゅう…きゅう！…ごじゅうっ！」
５０回振り終えたらその場に倒れこむ。
いい具合に影ができていてさらにいい気候だ。なぜ、こんな天気のいい日にみんな働くのか？疑問に思う。そんな馬鹿らしいことを考えながらもユージオは目を瞑った。
その様子にキリトは苦笑し声をかける。
「おい！寝るなよ？」
「寝ないよ。ただ気持ちがいいなぁって」
「それは…分からんでもない」
「でしょ？それで、どうだった？」
「あぁ、いい音が出てたのは５０回中６回だったな」

「…はぁ6回ねぇ」
　一年経っても斧を幹の中心に当てるのは難しい。それでも一年前に比べて斧の重さは軽くなったように感じているユージオだが…それでも難しいらしい。
「まぁ、僕たちが頑張ったところでギガスシダーを倒せるわけないんだけどね」
「そうだなぁ。それに変化が対してないからやりがいもないしな」
「ははっ、やりがいがあったら少しは楽になるのかな」
「そりゃーな。……まてよ？確認する方法があるじゃないか！」
　いきなり大きな声を上げるキリトにユージオは顔を歪ませる。当のキリトはイタズラを思いついた子供のように愉快に笑って幹の目の前に立つ。その様子からユージオは察したようで立ち上がった。
「ステイシアの窓を見る気？」
「まぁな」
「むやみに開くなって言われているのに、キリトはしょうがないなぁ」
「もうむやみにじゃなくてたまにだよ」
　キリトがそう言うのは既に二ヶ月前にもステイシアの窓ーステータスのようなものが載っているものを開いたことがあるからである。
　この世界では天地の間に存在する遍くものには、動く、動かざるに関わらず、生命を

司る創世の神ステイシアによって与えられた《天命》が存在する。虫や草花にはごくわずかの、猫や馬にはそれよりずっと多くの、人には更に多くの命が与えられている。

それらの命はひとしなみに、生まれ出てからある時点までは増加し、頂点を迎え、ついで減少していく。やがて命が尽きたとき、獣や人は呼吸を止め、草木は枯れ、岩は砕ける。

その天命の残量を、神聖文字で記したのが《ステイシアの窓》である。相応の神聖力を持つ者が、印を切り対象を叩くことによって呼び出せる。

そんな超がつくほど便利な物…それこそ《ステイシアの窓》である。もちろん、ギガスシダーの大きさであれば天命値は途轍もなく大きくユージオ達がどれほど頑張っても削れるのはたったの2程度のもの。日によっては2もいかないだろう。

ギガスシダーの天命は２０何万ほどあるのだ。その内のたったの2となればギガスシダーを倒すのは難しいと理解していただきたい。

「いいか、開くぞ」

キリトはそう言うと前に突き出した左手の人差し指と中指をぴんと伸ばし、残りの指を握った。そのまま空中に、這いずる蛇のような形を描く。そして、印を切った指先で、キリトはすかさずギガスシダーの幹を叩いた。

キンという澄んだ音が小さく響く。

と同時に現れたのはステイシアの窓。その薄い紫色に光る四角い窓には、直線と曲線を組み合わせた奇妙な数字が並んでいる。古代の神聖文字であるそれを、数字だけならユージオは読むことができる。

と言っても、転生者であるユージオはその数字を知っていたため他の人と比べて早くに覚えられていたということになる。

そんな神聖文字で書かれてあったギガスシダーの天命値はどれほど前と比べて変わったか。とユージオはその窓を覗く。

「２３万５５４２か」

「あー、先々月はいくつだっけ？」

「たしか……２３万５５９０くらい」

そのユージオの言葉を聞いてキリトは明らさまに落胆する。次いで、わしゃわしゃと黒い髪に指を立てる。

ユージオは予想できていた。と言わんばかりに落胆するキリトを見つめる。その目はこう言っていた。

ーーざまぁ

と。確かに、ざまぁなのであろう。

ステイシアの窓を勝手に見て落胆したのは勝手なキリトである。天命値がそれほど

変わらないということはキリトでも分かっていたはずだ。それを数字で見てしまったらそれが本当のことだと分かってしまう。夢は壊さないでおくべきものだ。
「たった、５０！二ヶ月こんだけ頑張って、２３万なんぼのうちのたった５０！これじゃ一生かかっても切り倒せねーよ！」
「いや、キリトが倒せるという夢を現実的に壊したんだよ？」
「え？ユージオそんな夢もってたのか？」
「は？」
「お前、俺がギガスシダーを倒そうと頑張っているたびに夢のないこと言ってたけど、実際は俺と同じで倒そうと頑張ってたんだな！」
「あはは、死ね」
なんなんだ、コイツは。
と思いながらも黒い笑顔をキリトに向けるユージオ。
その様子にキリトは「ちょっとー、ユージオくん？本気じゃないよね？」とユージオの右手に握られている斧を見ながら後ずさる。
「そんなことしたらいくらキリト様でも死んでしまう」
「知らないの？主人公はこういう時死なないんだよ？」
「主人公？なんの話を……」

「ん？こっちのはなし」
「そ、そうか。話をしよう！きっと分かりあえる！」
「ＭＵ☆ＲＩ」
　そして、そのまま斧を振り上げる。
　もちろん、キリトに向かって。
　その斧を振り下ろすと同時にユージオは斧から手を離し、キリトの脇を狙ってくすぐりを開始する。
　途端に沸き起こるのは苦しげな笑い。
「うぎゃっ、や、やめ…」
「キリト君はここが弱いのかな？いや、ここかな？」
　なんてユージオは言いながら取り敢えず色んな所をくすぐりまくる。キリトはこれ程というほどに笑い転げうまく呼吸もできていない。
（しょうがない。これくらいでやめてあげよう）
「こらーーっ！また、さぼってるわね!!」
　丁度、ユージオがくすぐるのをやめた瞬間にそんな声が聞こえた。その声の主は確認するまでもなくアリスだ。
　アリスの怒る声に二人は首をすくめてから、おそるおそる振り向く。

少し離れた場所にお昼ご飯が入ってあるのだろう籐籠をもった金髪美少女ことアリスが少し顔を膨らませて立っていた。
「や、やぁアリス、今日はずいぶん早いね」
「ぜんぜん早くないわ、いつもの時間よ」
ユージオがおそるおそる声を掛けると少し怒った声でそう返してくるアリス。それにあははと苦笑いを浮かべる二人。
「そ、そうだ！午前の神聖術の勉強どうだったの？」
「まぁまぁね」
「そうか……。アリスはやっぱり凄いね！ぼくだったらついていけないや」
そう、アリスはこの村の中では天才と呼ばれる部類に入る。だからこそ、彼女は神聖術の才能をもっと伸ばすため、シスター・アザリアから個人教授を受けている。
それでも、一日中勉強するわけではなく午後は家の手伝いなどの働きをするのだ。そうでなくては厳しい冬を村人全員が無事に越すのが難しくなる。そして、彼女がここに来た理由も午後の仕事に入るものだった。
「そうかしら？ユージオは勉強の方は出来ていた方だと思うわよ？」
「はは、ありがとう」
それもこれも前の知識があったお陰だよ！それがなかったら俺は生きていけなかっ

たよ！クソ野郎！などと心で叫びながらユージオはお礼を言う。
「さてさて、話は変わるけど仕事は終わったの？」
「あぁ、もちろんだ。な？ユージオ」
「そうだよ。僕たちはそんな不良じゃない」
「へぇ、まぁいいわ。早くお昼にしましょう。今日は暑いから、悪くなっちゃう前に食べないと」
そう言いながらアリスは籐籠から次々と料理を出していく。
どうやら今日は、塩漬けの肉と豆の煮込みのパイ詰め、チーズと燻製肉を挟んだ薄切りの黒パン、数種類の干し果物、朝絞ったミルクのようだ。どれも美味しそうなのだが……すべてのものに天命があり数値化されているこの世界では食べ物をあまりゆっくり食べることができない。もちろん、それは夏のみのことだが……。
そして生憎様、今は夏でありしかも料理たちは陽光を浴びている。これにより、天命が一気に奪われていっているのは確実だろう。
天命が尽きた料理はすなわち《傷んだ料理》で、一口でも食べれば、よほど頑強な体をもつものでない限り腹痛などの症状を起こす。所謂あれだ。消費期限が切れた食べ物を口にするようなものだ。
だが、この世界に賞味期限はない。消費期限はあるが賞味期限はない。とても重要な

ので二回言う。賞味期限は美味しくいただけるまでの期間だ。つまりその期限がないこの世界ではいつまでが美味しくいただけるのかが分からないのだ。天命が尽きてなくても美味しくなかったりしたらそれこそ意味がない。

「うわ、ミルクはあと十分、パイもあと十五分しか保たないわ。走ってきたのになぁ……そんなわけだから、ちょっと急ぎ目で食べてね。でもちゃんと噛まないとだめよ」

すぐさま料理の天命を確認したアリスの言葉を聞いてユージオとキリトは大きく切ったパイにかぶりついた。

なるほど、アリスも料理の腕は少しずつだが上がってきているようだ。アリスの料理に関しては賞味期限とかは関係ないのだろう。とか変なことを考えながらも口を動かし続けるユージオ。しばらくして何個か料理を食べたあとに一息をつく。

「ーーお味はどうだったかしら?」

アリスはずっと気になっていたらしく、真剣な顔持ちでユージオとキリトに感想を求める。それにユージオは真面目に答えた。

「うん、今日のパイは美味しかった。だいぶ腕を上げてきたね」

「そ、そうかしら。わたしはもう一味足りないような気がしたけど」

最近になってだがユージオも褒め上手になったものだ。

アリスも褒められて嬉しいのか顔を赤くしている。だからこそというべきか気づい

てない。ユージオはこう言ったのだ、今日のパイは！もではなくはとーー。つまり、前のは美味しくなかったと遠回しに言っているのであるコイツは。

「それにしてもーー」

そんなユージオの失敗にも気づかずにキリトは呑気にマリゴの実を摘み上げながら言う。

「せっかくの旨い弁当なんだから、もっとゆっくり食べたいよなぁ。なんで暑いと弁当がすぐ悪くなっちゃうんだろうなぁ」

「ついに、頭が暑さにおかされたの？夏は暑いんだからすぐに食べ物が腐るのは必然……あぁ、保冷剤とかあったらいいのかな」

「保冷剤？なんだそれ」

「え？あぁ、なんでもない。氷みたいなもののことだよ」

一瞬、冷やっとする。

彼らは日本語を話すので時々こういう風に常識語を言ってしまうユージオ。この村に保冷剤をつくれといっても理解できないだろうし第一そんな技術がない。だからこそここでは知られていないのだ。

「つまりだ。夏は暑い、冬は寒い。これらの違いは気温だ。つまり、夏でも寒けりゃ食べ物が長持ちするんだ。なら……寒くすれば、この時期だって弁当は長持ちするはずだ」

「じゃあ、あれだよ。氷とかで冷やしたりして籐籠の中の気温を下げればいんじゃないかな」
「それだ！」
「それだ！じゃないわよ。どこに氷があるっていうの？今は夏で氷なんてそうそうないわよ？」
アリスに正論を言われてしまいキリトも黙るかと思ったが彼の目にはなんとも言えない光が宿っていた。
こういう目をするキリトはロクでもないことしか考えない。そして、同時に嫌なことがあったことしかないという事実を考える。
「はぁ、キリト。今度はなにを考えてるのさ」
しばらくの沈黙。
そのあとにキリトは何か思いついたのか瞳を輝かせた。それにユージオは嫌な予感を感じながらキリトの次の言葉を待つ。そして出てきたのは……
「なぁ……ずっと昔、ユージオの爺ちゃんにしてもらった話、覚えてるか？」
ユージオの祖父からしてもらった話は沢山ある。そのなかで氷と纏わる話は一つだ。その答えにユージオは一瞬でたどり着きため息をつく。
――あぁ、嫌な予感が当たった、と。

そして、キリトがその話の題名を言おうと口を開きその口は確かにこう言った。
「ベルクーリと北の白い竜」
と。

3話　論破の冒険

『ベルクーリと北の白い竜』

それはこのルーリッド村では誰もが聞いたことのあるだろう武勇譚。簡単に言うとベルクーリという剣の使い手が川に流れていた氷を見つけ川沿いを上流へと歩くと巨大な洞窟が口を開けていた。その中で色々な危険を乗り越え一番奥の大広間までたどり着く。そこにいたのは、なんと人界の東西南北を守護すると伝えられる巨大な白竜だった。

大小無数の財宝を守るようにして眠っていた白竜。その財宝の中にベルクーリは一つの美しい長剣を見つけて欲しくなりーーー。その後は察してほしい。

つまり、キリトは氷を取りに行こうと言っているわけだ。しかし、例の洞窟がある場所は人界の終わりたる《果ての山脈》であり、そこに行くのは掟で禁じられている。

「あの話だと、洞窟に入ってすぐのところにでっかいツララが生えていたって言ってたろ？そいつを二、三本折ってくれば、実験にはじゅうぶん間に合うはずだ」

「なるほど……アリスは、言うまでもないか」

アリスもキリトと同じように瞳の奥に光を宿している。これは面白いと感じたかど

うかは知らないがアリスもこの意見には賛成なのだろう。そもそも、こうやって二人の相手をするから悪餓鬼とか言われるユージオ。そしてもともと悪餓鬼なキリト。村からは悪餓鬼なのに悪餓鬼で通っていない天才少女アリス。この三人が集まれば悪いことしか起きないのは当たり前である。

だからなのかユージオはもう慣れたというように小さく溜息をついた。

「ーー悪くない考えね」

「ですよねぇ、で？今度はどんな言い訳を？」

「言い訳じゃないわよ。確かに、子供だけで北の峠を越えるのは村の掟で禁じられているわ。でも、よく思い出してちょうだい。掟の正確な文章は、【大人の付き添いなく、子供だけで北の峠を越えて遊びに行ってはならない】ってなってるのよ」

「……」

その言葉にユージオは絶句した。

まさかっ、こいつ掟を全て覚えていらっしゃる!?と、さすがにビックリしすぎてーー。

そして、キリトを見てみるとキリトは、そうなのか？みたいな驚いた顔をしていた。

『掟』ーー正確には《ルーリッド村民規範》は、村長の屋敷に保管されている厚さ2センチほどの古めかしい羊皮紙綴りだ。教会の学校で覚えさせられるその掟は今や日常的に聞く言葉としてユージオの頭に染み付いてしまっている。それほど、この村では掟が

大切なのだ。だが、それでも一字一句間違わずに言えるわけではない。しかし、アリスは正確に暗記しているらしい。

（まさか、村の掟の二倍は分厚い帝国基本法も……、アリスのことだから更に倍はある〝あれ〟も完璧に覚えてそう……）

もちろん、ユージオはだいたいは覚えている。帝国基本法はもちろん更に倍はある《禁忌目録》という央都セントリアに巨塔を構える《公理協会》が定めた絶対の法すらもーー。

ユージオは既に赤ちゃんの時から字が読めていたので、情報収集のために家にあった本を片っ端しから読み、読み、読みまくり覚えてしまったという素晴らしい頭脳の持ち主である。転生様々なユージオ君です。なんて言われても文句は言えまい。

「いいこと？遊びに行ってはならない、これが掟の禁ずるところよ。でも、氷を探しに行くのは遊びじゃないわ。お弁当の天命が長持ちするようになれば、私たちだけじゃなく、麦畑や牧場で働いてる人たちみんなが助かるでしょ？だからこれは、仕事のうちと解釈するべきだわ」

いやー、素晴らしい考えですね☆と言わざるおえないほどの言い訳。このアリスの言葉にキリトも少しの躊躇いがあった目はいまや消え去り腕を組んでうんうんと首を縦にふる。

「うん、そうだな、まったくその通り」
「怒られても僕は知らないからね」
「いんだよ。怒られたらバルボッサのおやっさんがよく言う、命令されたことだけやるのが仕事じゃない、手が空いたら自分でやることを探して働け！という言葉を引き合いに出せばいんだよ」
「あー、確かに」
　バルボッサ家は、ルーリッドの村で一番広いムギばたけをもつ富農だ。その現在の家長であるナイグルおじさんはユージオとしては苦手なタイプだった。だからこそキリトの意見には激しく賛成だ。
　これで、奴に「ざまぁ」と言えることだろう。
「……でもさ、もう一つあるよ。果ての山脈に行くのは…《禁忌目録》でも禁じられてるだろ？それはどう言い訳するんだよ」
「だから言い訳じゃないってば！」
《禁忌目録》ではその名の通り《してはいけないこと》がひたすら列挙されているものである。《教会への反逆》や《殺人》《窃盗》といった広範な禁忌に始まり、年間に穫れる獣や魚の上限数。学校では必ず禁忌目録を教える、教えないということは認めない。というような細かなものまで…その数は軽く千を越える。

その禁忌目録を破り犯罪を犯す人は殆どと言っていいほどいない。何故だか此処はそういうことをまず考える人がいないのだ。所謂、理想社会である。

まぁ、とにかくそんな禁忌目録に書いてある果ての山脈を越えるなという法はとてつもなく重要なことなのか一番最初の方に書いてあった。《果ての山脈》の向こうに存在するという闇の国ーー神聖語で言うところの《ダークテリトリー》があるからしいが、ユージオにはなんで行っては行けないのかはよく分からない。たとえダークテリトリーにはゴブリンなどのモンスターがいるとされている。そして、そのモンスターと戦っているのが公理協会の整合騎士様だ。とするならばモンスターは倒せるということだ。ならば倒せばいい。なに、簡単なことである。

とは言っても、禁じられている。それを破ろうなどとユージオは考えたことはない。それに、破ろうとも思わない。

だというのに、今は破る一個手前まで来ていることにユージオは不安を覚えていた。

「じゃあ、なんだっていうのさ」

「本当にユージオは五月蝿いわね。目録にはこう書いてあるのよ。第1章3節11項、『何人たりとも、人界を囲む果ての山脈を越えてはならない』……山を越えるっていうのは、当然『登って越える』ってことだわ。洞窟に入るのは含まれないわよ。だいたいーー」

長い、とにかく長い。
まだまだ、アリスの言い訳ーーもとい論破は続く。
それをユージオはため息をつきたい気分で聞きながらアリスへ心の中での拍手を送る。それほどまでに素晴らしい意見だったと言っておこう。
「分かったって」
「よし！じゃあ、ユージオもオッケーだしたことだし次の休息日は白竜……じゃない、氷の洞窟探しだ！」
「（本音…最後まで隠せよ）」
「なんか言ったか？」
「あはは～なんにもイッテナイデスヨ？」
「じゃあ、お弁当は保ちのいい材料で作ったほうがいいわね」
キリトはノリノリで楽しみ、アリスもノリノリで意気込む。
それにユージオもノリノリでーーというわけではなく。
一人、懐かしそうに空を見上げた。
◆◇◆◇◇
7の月3回目の休息日。
今日は予定通り氷をとりにいくことになっていた。キリトたちとの待ち合わせより

1時間ほど早い時間、ユージオは北のルーリッドの門の周りにある木々を見上げて自分で手間暇かけてつくった木の剣をしっかり握る。その剣は何かを斬れるほどの斬れ味はもちろんない。

その剣を腰に構える。深く息を吸いこみ、剣を鞘から抜くようにイメージする。そしてーーフッと息を吐きそれと同時に剣を抜く。

曰くそれは、抜刀術と呼ばれるもの。

普通は抜刀術は刀でするものである。それをユージオは剣で再現した。その速さは刀でやるものと比べても遜色ない。

そして、その剣は木の幹へと吸い込まれるように軌道をえがきコンッーーという澄んだ音と共に当たる。

もし、これが本物の剣だったらその木は切株となっていたことだろう。これが、ユージオが長年の修行で身につけた力だった。

「ふう……まだだな〜」

それでも満足のいっていないユージオはブンブンと剣を振りながらもため息をつく。

(もっと…もっと速く)

そして、剣を次は前に構える。そして、振り下ろそうとした時、後ろから声を掛けられた。

「よっ！ユージオ！」
　急に掛けられた声にビックリしてユージオは剣を地面に落とす。
「あっ…」
　するとその剣は地面に落ちてすぐすると消えていった。おそらく天命が尽きたのだろう。
　振り下ろそうと力を込めていたときに落としたのだ。普通に落とすよりもダメージは大きい。
　それに、長年使ってきたのだ。そろそろ天命値がなくなるころだったというのもあるのかもしれない。
「……なんかすまん」
「いいよ。そろそろ新しくしようと思ってたから」
「ほ、ほんとうか？」
「本当だよ。それに剣を練習していてもほとんど意味がないからね。別に怒るほどのことじゃない」
「それもそうか……もし、青薔薇の剣があったらお前にやるよ」
「今日は氷をとりにいくのが目的でしょ？」
「そうだけどさぁ」

『青薔薇の剣』はベルクーリと北の白い竜に出てくる剣だ。
確かにユージオとしては非常に興味のあるものだが、すでに剣士になるという夢は絶たれている。
でも、まぁ、見れるのなら見てみたい。などと考えながら今度はアリスの到着を待つ。
集合時刻はすでに過ぎているのでアリスは遅刻ということになるのだが、女の子だから準備があるのだろうと納得し、ユージオはアリスが来るだろう道の方を見た。
そこには霧があるだけでアリスの姿はやはりまだない。
「それにしても、アリスは遅いな」
「そうだね。まぁアリスのことだから来るとは思うけど…」
「来なかったらシラル水を奢ってもらうさ」
「うーん、それは叶わないと思うけど」
それにしても、いい天気になりそうだな。
とユージオは空を見上げる。
その空は朝でもわかるほどに蒼く澄み渡っていた。とても本当にいい天気。だけどもなんだか胸騒ぎがする天気。
何も起こらなければいいなと考えていたところでユージオの目にアリスの金髪の髪が映る。

「来たみたいだよ。キリト」
「おっ！本当だ」
タッタッタとリズミカルに走ってきたアリスにキリトとユージオは笑って言う。
「「遅い！」」
「あんたたちが早すぎるのよ。まったくいつまでも子供なんだから」
何故か、時間通りにきたユージオとキリトが惨めにみえてくる言葉をアリスは言う。
それにユージオは理不尽だ。と感じながらアリスが渡してきた籐籠を持つ。どうやら、荷物持ちは男の役目らしい。
キリトも水筒を持たされている。
それを確認したアリスは進路方向へと向き直り、腰をかがめて足元から草穂を一本摘み取る。
そして、ビシッと指先を彼方にそびえる岩山に向けて元気よく叫んだ。
「それじゃ……夏の氷を探して、出発！」
それを見てユージオは苦笑する。
ーーどっちが子供だよ、と。
アリスが言ったことを踏まえて。
しかし、そういったアリスも可愛いので仕方がないのかもしれない。やはり可愛いは

正義だ。などとバカなことを考えながら軽い足取りで進むアリスの後をユージオもついていった。

４話　洞窟ってこんなに近かったんだね

冒険が始まって数分。

ユージオの目には前を歩くアリスの姿が映っていた。別に見惚れていたわけではない。アリスはいつも以上に軽やかなステップを踏み歩いている。そのステップを見てユージオは苦笑していた。

アリスは剣の練習ごっこの時でも天才っぷりを発揮した。どれだけ剣を振ろうとも当たらなければ意味がない。アリスは剣を避けるのがとても上手かった。今しているステップを使って。だから、ユージオやキリトは負けたと思うことが多かったものだ。

だからもし、アリスがあのまま修行を続けていたら、ベルクーリのようにこの村で最強の剣士になれたかもしれない。それが嫌で、ユージオは剣術により力を入れていった。

アリスにも勝てなければ自分を守ることはおろかここで守りたいと思った大切な人達を守ることも出来ないではないか、と。

そして、これを聞くと誰もが笑う。

守る？そんなこと出来るはずがないだろう？と。

ユージオは…否、ここにいるアンダーワールド人の農民達は殆どのＲＰＧゲームでの雑魚キャラのゴブリンにすら勝てなくて武器で戦うことすらも出来ない。それが出来るのはほんの一部の人間で、その中にユージオは含まれてはいないのだ。

所詮、ユージオは木こりで剣士ではない。木こりがどんな夢を見ようと人を守れるようになるはずがないのである。木こりにできるのは只、木を切り株に変えることだけで……そこに守るも何もない。

あえて言うのなら、森を壊すという逆のことをしているに過ぎない。

それでもユージオは夢を見る。

それは子供だと笑われるようなことだとしてもーー

それは馬鹿にされるようなことだとしてもーー

それは叶わないことだとしてもーー

衛士？そんなもの…ユージオが目指すのは剣士だ。

誰もが…村の子供達が、憧れる衛士。それは、そうそうなれるものではない。それでも、唯一武器を持てるそして剣術を習うことができる。それだけで皆が皆、憧れるのだ。

しかし、憧れているのは衛士ではなくさらに上の剣士。

衛士になれても剣士になれなかったら誰もが肩を落としてしまう。それほどまでに剣士というのは夢なのだ。

「剣術…かぁ」

ユージオはボソリとそう呟く。

圧倒的にユージオに足りていないものは技術である。抜刀術ぐらいなら、前世で聞いたこともあり見たこともあったので、再現できた。その再現がすでにオリジナルを超えていることをユージオは分かっていないが……それでも、ユージオにあるのはそれだけだ。

抜刀術が出来る?はっ、それだけで誰と戦えるんだよ。ペッ!と言われても仕方がない。ユージオは知らないがこの世界ではチート級の武器を使う奴が多いのだ。流石にそんな奴らと戦うのに抜刀術だけというのは舐めているのか?と言われても文句が言えない。

そもそも、本当に剣術が必要になってくるのかが分からない。本当にユージオとキリトは剣士になるべくザッカリアに行ったのか?という疑問がないとなれば嘘となる。

そして、一つの不安が頭によぎるのだ。

ーー僕がここに来たから物語が変わった?と。

それならば…自分のしてきたことは意味がないものである。まるで道化だ。道化ユージオ……実にありそうな展開だ。ちょっとだけ、ほんのちょっとだけ落胆したユージオに

「まだ、終わった夢じゃないぜ」
と、ユージオの呟きからなにを考えているのか悟ったキリトは言う。その言葉にユージオはびっくりしてキリトの方を向いた。そして、さっきの呟きが聞かれていたらしい、と納得する。
「ははっ、それはどうかなぁ」
すでに衛士の天職には、現衛士長の息子ジンクが就いていた。一番剣の腕がなかったというのにも関わらずだ。まったく、理不尽な話だ。
ユージオとしては個人の能力ではなく家で決まってしまうのだから、いつの時代の話だよ、と呆れるくらいである。
「まぁ、もう無理なんだろうけど…。だって、一度決まった天職は、村長にだって変えられないんだ」
「たった一つの例外を除けば、な」
「例外…?」
「仕事をやり遂げた場合さ」
キリトの言葉に、あー、そんなものもあったなぁと思い出し……
あることに気づく。
（え?まさか!?……んなバカなっ）

そう、きっとユージオの予想は当たっている。原作の彼らはやり遂げたのだから。

ーーギガスシダーを倒す

ということを。

つまり、それはユージオ達は剣士になれることを意味していてユージオにとっては小さな希望そのものであった。

自分から死地に向かおうとしている。という点をみればただの馬鹿だが、それ以上に剣での戦いは男のロマンだと思っているユージオにとっては死ななければいいということに尽きる。

その為だけに彼は木の剣を振りまくっていたのだからーー。

「あの樹をぶっ倒せば、俺たちの仕事は綺麗さっぱり完了だ。そしたら、次の天職は自分で選べる。そうだろ？」

「まさか…そうなのか？」

今も尚、その可能性を見つけ真っ青な顔をしているユージオ。

彼のメンタルがやわいのはすでに知っていることだ。この様子を見て今、彼は『アレを倒せる！』と『アレを倒せるはずがない』とで葛藤しているなどという馬鹿がいるのならばこう言ってやりたい。

アホか、これは葛藤ではない困惑さ（ドヤア

つまり、彼は『アレを倒す？うそだろ!?』というように困惑しているのである。それを事実だと受け止めるメンタルを持ち合わせていないそれが我らがユージオだ。
「おい、大丈夫か!?」
「アレを倒す……ぐはぁ、論外」
「なに!?聞こえないよ!!」
「なんでもないよ。もうダイジョウブ」
「とてもそうは見えねーよ!!」
「テヘヘ」
「何故に照れる!?」
もう、ユージオはダメかもしれない。
いや、天命的な意味ではなく精神的な意味で。
三途の川やとテクテク歩いていくユージオの肩をキリトはグッと引き止め焦る。
「おい!?そっちガチもんの川!!」
「……やぁ、キリト」
「大丈夫かっ!?」
「……はっ!?なんの話だっけ？」
キリトに強く肩を揺さぶられてやっと目を覚ましたユージオはキョロキョロと周り

を見渡す。その様子に本当に大丈夫か？というような呆れの目を向けるキリト。
「俺たちが剣士になれるかどうかの話だ」
「あぁ、そうだっけ？」
「そうだ。俺は今の天職で良かったと思ってる。絶対にあのギガスシダーを倒す方法があるはずだ。終わりがある天職でよかったよ。その天職が終わればーー」
「ザッカリアの剣術大会にでる？」
「おう！なんとかなるさ！」
アレを倒して？どんな主人公だよ。と心の中で思いながらやっぱ主人公はチートだよなぁ、などと考える。
そして、やはり懐かしそうに空を見上げて思い出す。
どんだけ頑張っても主人公にはかなわないそんなこと知っているはずだった。それでもユージオは剣術をーー抜刀術を磨いてきた。いつか主人公の隣に立てるように……それは子供の時の昔からの夢。誰もがヒーローに憧れた時の子供の夢。あぁ、なりたいと馬鹿やって○○ごっことかいってはしゃぎまわったときの懐かしい夢。
でも、ユージオは違った。他の子供とは違ってその主人公を支えるまたは共に歩むそんな仲間に憧れを抱いた。
ーー主人公の隣に……

目を輝かせながらユージオは否、朔弥はヒーロー番組を釘付けにして見る。

ーー立ちたい…

そして、よくセンターにいるレッドの隣を指差して笑った。

そんな懐かしいことを思い出していた。そうだった、俺は主人公に憧れたわけじゃなかったと改めて思う。とその時、前を歩いていたアリスがクルリと俺たち二人の方へ振り返る。

それに今は冒険中だった。と思い出してキリトと顔を見合わせて笑う。

「こら、なに二人で内緒話してるのよ」

「いや、何でもないよ。あえて言うなら昼飯はまだかなー的なやつだよ。ねぇ?キリト」

「あ、ああ」

「あっきれた、まだ、歩き始めたばかりじゃないの。それより、ほら、川が見えたわよ」

アリスが草穂で指す方を見ると、道の先で水面がきらきらと揺れていた。ルール川と呼ばれるこの川は果ての山脈に源流を持っているためこの川に沿って北に歩けば洞窟につくこととなる。分岐点を過ぎてどんどん北のほうへと歩く。その間にした会話といえばキリトに関しての昔話くらいである。

「ねぇ、あれ……」

ふと、目を凝らしてよく見てみると先の方に洞窟らしきものがあった。しかし、ユー

ジオはおかしいなと頭を悩ませる。なぜならば、あまりにも早過ぎるからだ。子供の足で果ての方まで行くとなると半日はかかるだろうと予想していた。それなのにかかった時間はそれよりもとてつもなく早い。しかも、ユージオ達は《北の峠》を越えた覚えはない。

「早過ぎやしないか？」

「ええ、それに《北の峠》ってどこだったの？」

キリトとアリスもユージオと同じ意見のようでそう疑問を口にする。しかし、誰も答えることなどできない。何故なら、誰もわかっていないから。しばらくの沈黙――。それを破ったのはアリスだった。

「あれが果ての山脈なら……あの向こう側が、闇の国ってことなの？だって……私たち、もう四時間くらいは歩いたけど、でもその程度じゃザッカリアの街にだって着かないわよ。ルーリッドって……本当に、世界の端っこにあったのねぇ……」

そうなのだ。そう考えることしかできないのだ。

幾ら何でも早過ぎる…それならばルーリッドはユージオ達が思っていたより果ての山脈の近くにあったということとなる。

「そ、そんなはず……」

「どうしたんだ？ユージオ」

「いや……なんだか、分からないけど…何かが変？」
「そうだな。確かにこんな近くに果ての山脈があるのは変だ」
「そうじゃなくて……何かがおかしい？」
　はっきりしろと思ってしまうのが普通だと思う。ユージオはよく分からないと頭をぽりぽり掻きながら頭にハテナマークを浮かべる。はっ、お前がハテナマーク浮かべてどうするよ。ハテナマークを使いたいのはこっちだとキリトはきっと思ったことだろう。というより、思わなかったらヤバイ。
「まぁ、いいわ。入る前にお弁当にしましょう」
　パンーーと仕切り直すように手を叩きアリスは洞窟前に座る。それに続いてキリト、ユージオと円になるようにして座り、真ん中に水筒と籐籠を置いた。
「待ってましたー!!」
「キリトうるさい」
「なんだよ。じゃあユージオのご飯はなしで」
「なん、だと!?そんなことさせるか」
「二人ともうるさいわよ」
　キリトとギャーギャー言っていたユージオにアリスがどっちもどっちよと声を掛ける。そして、それぞれの料理の天命値を確認した。全部、天命値がきれてなかったよう

なので先ずはとパイを頬張る馬鹿二人。それで満足したらしい。ようやく落ち着いて二人は口を開いた。
「そこの洞窟で…氷が見つかれば、明日の昼飯はこんな慌しく食わなくてもよくなるんだよな」
「そうだね。…でもさ、持って帰った氷自体の天命はどうやって保たせるの?」
「む…」
　それは考えていなかったのかキリトは眉を顰める。その様子に呆れながら今度はアリスが口を開いた。
「急いで持って帰って、うちの地下室に入れておけば一晩くらいは大丈夫でしょう。まったく…それくらい考えておきなさいよね」
「な、なんかすみません」
　ユージオが謝るのをみてキリトは惨めだなぁと自分のことでもあるのに他人事のように思いながら残りの食べ物を口に入れた。
　お弁当タイムが終わるとアリスは立ち上がりシラル水が入ってあったコップをもってすぐ傍のせせらぎまで歩く。どうやら、コップを洗うつもりらしい。川水に手を入れ……
「うひゃっ」

と妙な声を上げるアリス。
「どうしたの？」
「川の水、すっごく冷たいよ！真冬の井戸水みたい」
そりゃ、すぐ目の前に洞窟があるしね。と思わなくもないユージオだったがなんとか言うのを踏みとどまり笑いながら川に手を入れる。
アリスは興奮しきっている様子でユージオの変な笑いには気づいてないみたいだ。そんな、なんとなく楽しそうな雰囲気を出す二人をキリトはニヤニヤと様子を見ながら洞窟の方へと向き直る。
「さてと、そろそろ出発しますかね」
二人には聞こえないように言ったキリトだったがあの地獄耳の二人には聞こえたらしい。すぐさま川から離れて洞窟前まで来る。そしてーー。
「そうね。行きましょう」
「うん」
少し緊張した声を出しながら二人は否、三人は先が真っ暗な洞窟へと足を踏み入れた。

5話　洞窟にあるもの

入った瞬間に気づいたことがある。

ーー中ってやっぱり暗いよね。

そんな当たり前の事に今気づいたユージオは焦っていた。何故かと言えば、近くには川が通っているのにもかかわらず中は暗くて足下が見えない。お分かりだろうか。そう、川にドボンという未来が予想できてしまうことに。

「ねぇ…このまま進まないといけないの？」

後ろにいるはずであろう二人に向けてそう声をかける。が、一向に返事は聞こえない。暗闇の中を一人（ボッチ）で歩いている感覚である。

「おーい、聞いてる？」

そう投げかけてみるもユージオの声に応える者はいない。流石にこれは変だと思って後ろを振り返ってみる。するとどうだろうか。ずっと後ろの方に光源が揺れているのだ。つまり、後ろにはさっきから本当に誰もおらず、後ろと言っても本当にずっと後ろの方で光が揺れているということだ。

「あっれぇ？」

これにはビックリなユージオ（鈍感）。
すぐさま、二人の方へ走り出し肩で息をしながらもようやく着く。この時に、川にドボンしなかったのは運が良かったとしか言いようがないが。
「先行き過ぎよ。光もないのに、どうやって進むつもり？」
「あ、確かに」
呆れたように言うアリス。
その正論に、ユージオは恥ずかしそうに、はにかみながらも肩を竦めさせる。その姿はまさに命乞いをしているウサギのよう。
そんなユージオだからこそ、キリトに馬鹿にされることがあるのだろう。
「ハッハッハ、まったくユージオは」
「んん？キリトは気付いたのかな？」
「いや、まったく!!!」
オイ。
そんな突っ込みを心の中で盛大にしながらも、ユージオはキリトの肩を軽く叩いた。
こいつは何で自信満々にケンカを売ることができるのだろうか。そんな疑問を持った表情でキリトを見ていたユージオにアリスは光る草を持たせる。
「ほら、行くわよ」

「え、僕が一番前？」
「当たり前じゃない。なにせ、早く進みたいようだし？」
「いや、さっきのは二人が声をかけてくれないから！」
「掛けようとしたさ。でも、先々行くお前を見てたら…声掛けにくくて」
いや、声掛けろよ。
またも心の中でツッコミをするユージオ。
本当にどこまでもキリトはヤンチャらしい。ユージオは溜息をつきながらも、まだ先の見えない暗闇へと歩き始める。
どうせ、アリスの決定は覆らないのだ。一番前を歩くしかない。流石に女の子を先に行かせるわけにもいかないことだ。
それでも、ユージオの胸には不満が残る。
「そういえば、洞窟に入ってすぐのところにツララがあるって言ってたけど……ないね？」
仕返しだ。と言いたげな皮肉をユージオは背後のキリトに向けて言う。
「言ったっけ、そんなこと」
当然、惚けるキリト。
「自分の言ったことに責任を持ちなよ」

苦笑いをしながらもユージオは言う。
ユージオとしては、ツララがあってもなくてもどうでもいいのだ。ただ、キリトの言葉が嘘か真かを言及したいだけなのである。
「もう、二人とも煩いわよ。ユージオ、灯を近づけて」
「いいけど…」
アリスのおかげか静かになった二人。
ユージオはアリスに灯を近づけると、アリスはその灯に向かって息を吐き出した。冬のように霧になって出て行くその息に感嘆を漏らす。
「洞窟の中だから当たり前だけど……やっぱり、気温が下がってるようだね」
「洞窟の中だから当たり前?…ユージオ、洞窟に入ったことあるの?」
思わず零したその言葉にマズイと口を閉じるがもう遅い。
やはり、ユージオは馬鹿であるらしい。
アリスの言及にユージオは「あの、えっと…その」と口篭る。そんな彼に流石に怪訝な目を向けるキリト。
「いや、これは。そう!本で見たんだよ!!ソルス神の加護が届かないから気温が低いらしいよ!」
適当にそんなことを言うユージオ。

それでも、二人の疑いの眼差しは変わらない。
「それに、いつどうやって、僕が洞窟に行けたって言うの？」
必死な言葉にキリトは確かにと考え始める。が、アリスはそれでも疑問が拭えないようだ。
洞窟について書いてある本なんて村で見たことがなかったからだ。
「ま、いいわ。ユージオは博識だもの」
「まぁ、ね」
博識と言えるのかは分からないが、確かにこの場においては博識とも呼べるのかもしれない。
ユージオとしては、まだ使っていい言葉とダメな言葉の区別が分かっていない状態である。
「じゃあ、はやく進もうぜ。肌寒い理由もわかったことだし」
「そうだね。多分、氷もこの奥にあるはずだ」
そうと決まれば、すぐに先頭を歩き始めるユージオにアリスは苦笑して「そうね」と背後を歩く。
後はもう、ひたすら歩くだけだった。
途中、白龍がいたらどうする？だとか、帰りの話だったりとか色々したが、その間に

何かあったわけでもない。
平穏そのもので、最初に怖がっていたのが嘘みたいだ。
「もうそろそろかな」
そう予想を立てた時、ぱりん、という音がユージオの足元から響く。あわてて、光を近づけて思わず声を漏らした。
「あ、氷だ」
腰を屈めて氷を確かめるアリスとキリト。
光を反射してキラキラと光るソレは確かに氷のようだった。そんな事実に三人は思わず笑みを漏らす。
「この先にもっとあるはずだ」
ユージオは光を振って周囲を照らすと一気に走り出した。
もちろん、足を滑らせるなどということはない。二人共が付いてきていることを確認しながらユージオはさらに奥へと進む。
「あ……なんか、いっぱい光ってる」
ユージオの持っている光を反射しているのだろう氷を見つけた瞬間だった。その方向へ向かって進むと突然、岩壁が消え、広い空洞が姿をあらわす。
観光名所にもなり得そうな幻想的な空間。

ほぼ、円型に湾曲する周辺の壁は氷で覆われているようで今もキラキラと光っている。

さっきまでの寒さと比にならない冷気に肩を震わせたユージオは息を吐いた。

「……綺麗」

ようやく呟いた言葉はそんな単純なものだった。

巨大な池、湖ともとれる床面。その水面はすべてが氷でまさに氷の冷蔵庫である。

何もかもが氷なのだ。ユージオだって、こんな幻想的な空間を生前に見たことがない。

「……これだけ氷があったら、村中の食べ物を冷やせるわね」

まったくもって、その通りだ。と、ユージオも頷く。

まだ、奥にも続いているらしい洞窟にキリトが行こうというので三人で更に歩く。

もしかしたら、本当に伝説の剣があるかもしれない。そう思うとユージオの足は奥へ奥へと向かう。

もう、誰にもこの三人を止めることはできないだろう。

「…なんだよこれ…」

「どうしたの？キリト」

「なんなんだよ、これ！」

急に声を上げたキリトにハテナを頭に浮かべる。
隣にいたアリスと顔を見合わせて、すぐにキリトの方へ向かうと其処には黄金に輝く宝物とそれを守るようにある大きな骨。
恐竜の骨みたいだ。なんてユージオは考えながらも、その骨に近づいた。
「白竜の……骨？」
小さく聴こえたその声に、ユージオはやっと状況を把握する。
白竜なんて、日本でもよくあるお伽話の存在だと心の中では思っていたのだろう。だが、確かに、ユージオの目の前にある骨は竜のようだった。
「死んじゃったの…？」
「ああ……。でも、ただ死んだんじゃない」
そう、ただ死んだわけではない。
ユージオは骨の中でもっとも迫力のある頭蓋を撫でて、骨の傷を見た。流石にユージオでも気づくその傷は、剣の傷のようだった。
「骨に剣の傷が沢山、刻まれてある」
ユージオは二人の方に向き直って言う。
竜を殺す。ＲＰＧものだと最強として位置づけられる竜種。簡単に出来ることじゃない。

「あぁ、だから。この竜を殺したのは人間だ」
ひゅっと息を呑むような音とともに、アリスは何かに気づいたのか顔を怖がらせる。
ユージオに至っては、倒した人間凄いな、なんて軽い感想を抱いている。そんな彼の心情を知ることなく、アリスの顔は深刻に影っていった。
「……整合騎士…？公理教会の整合騎士が白竜を殺したの？」
恐れに満ちたその囁き声に、ユージオは馬鹿な考えを打ち払った。
ここはＲＰＧといったゲームのような世界ではないのだ。プレイヤーではなくＮＰＣといえるＡＩだけがいる世界。
倒した人間凄いなという考えは馬鹿まる出しである。問題は、なぜ倒され、誰が倒したか。そもそも倒せるほどのプレイヤー（ＡＩ）なんて整合騎士ぐらいしかいないのだ。
しかし、善性の象徴であり、人界の守護者である白竜を整合騎士が殺すなんてあり得るのだろうか。
「……解らない」
キリトの言葉に、同じように頷く。
公理教会を疑ったことなどないが、確かに、日本と比べると統治が完璧すぎる。つまり、なにか裏があってもおかしくはない。
よく考えてみれば、なんで気づかなかったのか解らないぐらいだ。

「っ、イタッ」
不意に、右眼が疼く。
しかし、それも一瞬のことでユージオは首を傾げた。
「もしかしたら……闇の国にもすごい強い騎士がいて、そいつが白竜を殺したのかもしれないし……。でも、そんなことがあったなら、今までに一度くらい闇の軍勢がはてな山脈を越えて来たりしててもおかしくないはずだ。少なくとも、宝を狙ってのことじゃないみたいだけど…」
それもそうだ。
意外にも頭が回るキリトに驚きながらも、状況整理を行っていく。
しかし、自分達に出来ることなんて一つもない。とユージオは溜息をこぼした。
「それにしても、竜がいるなら、青薔薇の剣もありそうだけど…」
キョロキョロと辺りを見渡しながら言う。
そんなユージオに、キリトもつられて辺りを見渡し、宝の山に近づいて行く。
「お、あったぞ」
そう言いながら、引っ張り出した物は白革の鞘と、白銀の柄を持つ一振りの長剣だった。
柄の各所には精緻な青い薔薇の象嵌が施され、まさに逸品である。

「うお……めちゃくちゃ重いな……」
よろけながらも剣を引きずるキリト。
やはり、剣を装備するにはそれほどの筋力がいるらしい。この世界でそれが必要かどうかは分からないが。
「竜を殺した奴はどうして持って行かなかったのかな…」
そう零したキリトにあぁ、確かにと考える。
しかし、ユージオにはその答えが出せないのだろう。永遠と思考がグルグル回るだけである。
その間にも、キリトは青薔薇の剣を持ち上げようと奮闘するも見事に玉砕。
「…だめだ!!」
「うーん、そっか。宝物もあるみたいだけど…」
「持って行く気にはなれないわ」
まぁ、そうだろう。
ユージオもキリトもアリスの神妙な声に頷く。
「予定通り、氷だけ貰っていくことにしよう」
それならば、きっと白竜も許してくれるはずだ。
少しだけ目を閉じて、手を合わせたユージオはそそくさと氷を集めて、アリスの持っ

ている籐籠へと入れていく。
何故だか、早く帰りたいという気持ちが強く出てきているのだ。ここにきて、ヘタレ心が発揮されたのだろう。
「よし、早く帰ろう。時間も気になることだし」
そう言えば、アリスもキリトも氷集めをやめて立ち上がる。
キョロキョロと周りを見渡して。
「えっと…帰り道は……」
「「こっち」」
見事に三人バラバラである。
随分、話し合った結果。ユージオが割った氷があれば当たりという事だったので、それぞれ見て回ることに。
まずは一番近い出入り口から。
「俺はあっちだと思うけどなぁ」
そう未練がましく零すキリトを無視して、足速に進んでいく。
しかし、何故だか嫌な予感がして立ち止まったユージオは首を傾げた。朝と似たような感覚だ。
「どうしたの？ユージオ」

「いや、割れた氷なんてないし。別の道に行って見ない？」
「もうちょっと先だろ……あ、ちょっと、静かに」
不意に、キリトが唇に指を当てたのでそれに従って二人は黙る。
静かになったことで、自然の音が洞窟内に響き渡る。そんな中で、確かに風の音が聴こえた。
「あっ……風の音？」
アリスの呟く声に頷いて、それでも行くのをためらってしまう。
なにせ、嫌な予感はまだ収まっていないのだ。別にユージオは自分の勘が当たる方だとは思っていない。厨二病って訳でもない。
ユージオは思い出す。生前、結衣が「アリスが法を侵しちゃってね。これからが楽しみだ!!きっとユージオ君とキリト君が助けてくれるんだろうなぁ」と言っていたことを。
「外が近いんだ」
小さく言ったユージオの言葉に、アリスは出口に向かって歩く。
その足取りは軽やかに見えた。
「でも、夏の風があんな音出すかなぁ？なんか…冬の木枯らしみたいな…」
怪しむように言うキリト。

しかし、外が近いことには変わりない。嫌な予感がするがここは進むしかないのだろう。

「出口だ！」

杞憂に終わったのか。

ユージオは漏れ入る光に安堵し走り始める。しかし直ぐにそれは絶望を生んだ。

その光はソルス神によるものではなく赤色の地獄の空による光。緑色の草木はどこにもない。あるのは枯れた土地と剥き出しの黒色の岩肌。

よく考えなかったことを後悔した。ユージオは、その広がる知らない世界を青ざめた顔で見る。

アリスの侵した法とは、つまり禁忌目録の《ダークテリトリーへの侵入》であることだと確信した。

「ダーク、テリトリー……」

掠れきったキリトの声。

早く逃げろと言う脳内に、しかしユージオの身体は言うことを聞かない。

「ダメだ。これ以上、進んだら」

やっと、出てきた言葉。

そして震える身体に鞭打って、二人の手をユージオはそっと握った。

6話　変えられない運命

闇の国。またはダークテリトリー。

外が近いからと歩き続けなければ良かった。そんな後悔とともにユージオは空を見上げた。

赤い赤い空が続く景色の中で、キラリと煌めく一筋の光。まるで、星のようなその輝きに目を奪われる。

あれは……。

「…整合騎士だ」

聞こえるかどうか分からないくらい小さな声でユージオは呟く。

その瞬間に、赤い空に黒い何かが現れ、その光と交差し始めた。かすかに響く金属音。整合騎士が戦っているのだろうことはすぐにわかる。

「竜騎士だ…」

隣で空を見上げていたキリトが掠れ声で囁いた。

黒い何かは闇の国の騎士なのだろう。そして、闇というだけあって、その剣は瘴気のようなものを放っているのが分かる。対して、整合騎士の剣はまさに光だ。その闇と光

が衝突するたびに、火の粉が宙を舞う。
「白いほうが…教会の整合騎士、なのかしら……」
そんなアリスの声に、ユージオは頷き「僕はそうだと思うよ」と声を上げた。
ダークテリトリー目前、しかしユージオの頭の中では危機よりも好奇心の方が勝る。ずっと、死なない為に頑張ってきたユージオ（朔弥）にとって整合騎士は目標でもあったのだ。
世界最強だと言っても過言では無い彼等と同等の技術を持つことができれば、そう簡単には死なない筈だ。そんな考えを抱いて必死に剣術を密かに極めていたのだから。
この戦いの行方をみたい。結局は整合騎士が勝つだろう。そんな気持ちと予想を立てて見守り始めるユージオ。
「黒いのは、闇の軍勢の竜騎士、かな…。整合騎士と、互角の強さだな……」
「いやいや、整合騎士が闇の騎士に負けるはずがないよ」
キリトの見解を否定して、ユージオはやれやれと息を吐く。
ちょうどその時。
闇の国の騎士のバランスが崩れた。どうやら、戦いは整合騎士の勝利のようで、墜落して行く黒い竜に騎士をボーッと眺める三人。しかし直ぐにユージオは、嫌な予感を感じてか一歩下がった。

「ねぇ、もう行こう」
さっきまでの興奮はすでに収まり、アリスをダークテリトリーに近づかせないように手を引くユージオ。
アリスの手を離さなければ、きっと《ダークテリトリーへの侵入》は起こらないだろうと、信じるが故に。
「痛っ」
アリスの顔が僅かに歪んだ。
強く握りしめすぎていたのだろうことにユージオはようやく気づき、パッと手を離す。
そして、洞窟の外から聞こえる鈍く大きな音。
黒騎士の剣なのだろう黒い剣が地面に突き刺さっていた。そして、次に騎士が墜落する。最後に、かなり遠い岩山に黒竜が激突し、周りに断末魔が響いた。
思わず、ユージオは洞窟の外を見やる。
「え……」
アリスが細い声を漏らした。
黒騎士は苦しそうにもがき、上体を起こそうとする。胸からは血がどくどくと流れ出て、もう助からないだろうことはユージオ達でも分かった。

黒騎士の助けを求めるような右手が三人に伸ばされ、その直後に鎧の喉元から鮮血が迸り、騎士の右手は上体は地面へと沈み込んで行く。

大量の血が何故か死んだ時と重なって、ユージオは吐き気を覚え、しかし踏み止まる。誰かの目の前でしかも、女の子の目の前で吐くなんてものはユージオのプライドが許さない。

「あ……あ…」

そんな中で、その騎士に吸い込まれるようにアリスは進む。洞窟の外へと向かって行く。左側でキリトが「だめだっ!!」と叫ぶ声を聞いて、ユージオはげっそりとした顔で悟った。

これはきっと、変えられない運命なのだと。

キリトの声にびくんと体を震わせたアリスは、立ち止まろうとしたが、足がもつれて体が前に傾く。

必死にアリスの服を掴もうと手を伸ばす二人。その手はアリスの服に触れることもなく宙を切って、アリスは虚しくも洞窟の地面に倒れこんだ。

ただ、転んだだけ。それだけならどれほど良かったことだろう。そのアリスの指先は確かにダークテリトリー内に侵入していて。

ユージオは自分を殴りたくなるほどの衝撃にかられる。知っていたのに。知ってい

たのに、この結末を変えることが出来なかった。そんな自責にいや、まだだと顔を上げた。

「アリスっ!!」

二人して叫び、アリスの体を掴むと洞窟内へ引き戻す。誰にもみられていないことを願うしかなかった。ユージオは先ほどの整合騎士がいるかどうか空を見つめ、その後に洞窟内へと視線を動かす。

大丈夫だ、きっと。そう言い聞かせ、アリスの指についた黒い土を払い落とした。

「……わ、…私…」

「大丈夫だよアリス。誰もみてない。それに、転んじゃっただけだ。洞窟からは出てないんだから心配する必要はないよ」

きっとそれは、ユージオ自身に言い聞かせる言葉だったのだろう。

これは、禁忌を犯したわけではないと。正当化するためだけの言葉だったのだろう。

「きっと、大丈夫なんだ。そうだろう?·キリト」

縋るように力なくユージオは聞く。

しかし、キリトはただ静かに周囲に視線を走らせるだけで、返事はない。そんな様子にユージオは首を傾げる。

「ど、どうしたんだ?·キリト」

「……感じないか、ユージオ。なんか……誰かが……何かが…」

不意に襲ってくる違和感と不安にユージオは身震いをした。

あの、物語の主人公であるキリトがそう言うのだ。不安にならない訳がないだろう。同じように周りを見渡すユージオ。しかし、先ほどと同じで整合騎士がいるわけでも他の人間がいるわけでもなく、洞窟内には何もない。

「気のせいじゃ…」

ユージオの言葉が途切れる。

嫌な予感が背筋を凍らせていく。キリトはユージオの肩を思い切り掴むとナニカがある方向へ視線を向けた。

それは、明らかに洞窟にはなかった奇妙なものだった。水面のように揺れる紫色の円。その中に見えるのは――――人の顔だ。まるで、ホラー映画のようだとユージオはソレを見た。

皮膚は生白く、頭はスキンヘッドのように一本の毛も生えていない。まるでドールのような表情筋。何も読み取れないその表情からしかし、ユージオだけは直感的に察した。ソレの視線の先は間違いなくアリスであると。

「シンギュラー・ユニット・ディテクティド。アンディー・トレーシング……」

不意にソレが奇妙な言葉を発した。

英語であることはユージオにも分かるが、意味を問われると流石に分かるはずがない。なにせ、生前は英語が苦手だったのだ。

「コーディネート・フィクスト。リポート・コンプリート」

また英語が発せられる。

そして、紫色の窓は消滅した。そこに残るのは洞窟のゴツゴツした壁だけで、特に何もない。

どこか神聖術の式句に似ていた気がしたユージオは一応、アリスとキリト、最後に自分の体を見るがなんの変化もないようだった。

最後の言葉がコンプリートだったことから何かを完了したことは間違いない。そう考えた、ユージオはもう手遅れだと知る。

「帰ろう、か」

あの怪奇的な現象を見て、小刻みに震えるアリスにそう手を差し伸べる。キリトはさすがというべきかあまり、動じていないようだった。ユージオは、実のところもう限界である。後悔と自分の弱さに押し潰されそうになりながら、なんとか立っている状態だ。

そんな二人はアリスを抱きかかえるようにして洞窟の奥へ――――また来た方向へと進み始めた。

どのようにしてルーリッドの村までたどり着いたのか、ユージオはよく覚えていない。

限界を迎えた足でようやくいつもの景色を見たときは、さっきまでの冒険が嘘だったのではと夢見るほどだった。緊張感が解れ、安堵からか三人はようやく小さな笑みを交わし会話を開始する。

とにかく、逃げるようにして帰った帰り道は切羽詰まるものがあったので、ずっと話していないようなそんな感覚がユージオにはあった。

「ほら、アリス、これ」

キリトがアリスに差し出したのは、今日の冒険の成果だ。

しかし、それを見るとユージオは胸が痛くて仕方がない。物語通りに行くのであれば、アリスは王都に連れて行かれるのだろう。それも、自分のせいでだ。気づいていたのに、何も出来なかった罪は重い。

「その氷があれば、ゆっくりご飯が食べられるね」

今すぐ、泣き喚いて、アリスを連れて何処か遠くへ行けたらいいのに。そんなユージオの願いは叶わない。

だからと。ユージオはいつもの日常に戻ったふりをする。隠し事は苦手なユージオ

だが、今だけは気づかれるわけにはいかないのだ。
「帰ったらすぐ、地下室に入れておいたほうがいい。そうすれば、明日までには持つんじゃないかな」
「……うん、解った」
素直な返事をしたアリスは二人を見ると、やっと普段の調子に戻って、笑顔を浮かべた。
「明日のお弁当、楽しみにしててね。頑張ったご褒美に、腕を振るっちゃうから」
あぁ、それは楽しみだ。
いつ最後になるか分からないアリスのお弁当だからこそ、そう思うユージオ。いつもだったらここで、腕を振るうのはサディナおばさんだろと思っていたに違いない。
「あぁ、楽しみにしてるよ。アリスの弁当は美味しいからね」
「え、あ、うん。そうね」
少しだけ、顔を赤く染めたアリスにキリトはニヤニヤとした顔を向けながらも「もう、帰ろうぜ」と歩き始める。
闇の国とは違った赤さを持つ夕焼けの空の下を、三人はそれぞれ違う方向に向かって歩き始め、丁度、六時の鐘がなる前にユージオは自宅に着く。
今日の冒険は誰にも言えそうもなかった。そして、誰かと話す気分でもない。ユージ

オはただこのまま何も起きないことだけを願うことしかできなかった。
そして、それは叶うこともなく。
物語は動き始める。
数年後の未来へと向かって。
あるいは、最後の戦いに向けて。
大きな大きな運命の歯車は回り始めた。

7話　決して破れないもの

目を瞑る。

心地よい風が肌を撫で、髪を躍らせる中でユージオは棒を振った。いつも通りその棒は、宙を切って軽やかな音を奏でる。

もう何千回と素振りをしてきたからか、ユージオの手には手豆が沢山出来ていた。もっとも、竜骨の斧を振っているせいでもあるが。

「ひゃくっ!!」

薄っすらと額に汗が浮かび、それを軽く拭うとユージオはソルスに向かって手を伸ばした。東から昇ってくるソルスはさんさんと輝いて、闇を払っているようにも見える。

そのまま、アリスの罪も払ってくれればいいのに。とユージオはソルスの光を掴むように掌を握った。その瞬間、パキンっと木の棒が折れてエフェクトと共に地面に落ちる。さっきの素振りで天命に限界が来ていたのだろう。

「やっぱり、木の棒じゃダメだよなぁ」

そうボヤきながらユージオは折れた木の棒を拾った。そしてそれをくるくると手で弄び始め、思いっきり投げる。

草むらへと斜方投射された木の棒はコツンと軽やかな音と共に聞きなれた声を引き出した。
「痛っ!!」
「あのなぁ、キリト。バレてるんだよ」
「さすが、ユージオ。俺の隠れ場所を見つけるとは」
少しだけ赤くなった額を抑えて、草むらから出てきたキリトはユージオの肩をポンポン叩きながら笑った。
いつも通りのキリトの笑顔に、ユージオはどこかホッと安心しつつも、やはりこれからのことを思うと胸が痛む。もし、アリスが連れて行かれてしまったら、こんな何気ない会話もできなくなってしまうのだろうか。そんなヘタレな考えが頭をよぎってユージオはキリトに背中を向けた。
もちろん、酷い顔をしている自分を見せないためである。
「ま、キリトの隠れる場所なんて分かるよ。なんなら、毎日隠れんぼでもするかい?」
「言ったな?」
「うん。そのかわり、キリトも見つけろよ?」
「任せとけ!!」
そう胸を張って言ったキリトは「さて、仕事に行くぞー」とギガスシダーに向かう道

を歩いて行く。まだ時間的には早いが、その背中を追うようにユージオも足を動かした。酷い顔はなおっていないが、何かをしていないと自分の弱さに負けそうでさらに酷い顔になるだけだと思ったからかもしれない。

いつもと同じ道、変わらない風景。

それなのに、この一本道が永遠と長く続くような気がしたユージオはただ、仕事のことだけを考えて進むしかなかった。

◆◇◆◇◆

時間はやはり流れるのが早い。

嫌なことがあっても、時間が進んでほしくなくても、着実に時は残酷なことに刻まれて行く。

いつも以上に集中して斧を振ったユージオは、高く登ったソルスを呆然と見上げた。確かに、空腹感はあって今にも鳴き出しそうなお腹に手を添える。後少ししたら、いつも通りアリスが籐籠をぶら下げて「もうお昼よ」とやって来る事だろう。

昨日、持って帰った氷で冷やされた食べ物はいつも以上に天命値が残っていて、ゆっくり食べることができるはずだ。

「さて、と」

そうとなれば、はやくに仕事を終わらせてしまおう。

そんな事を考えて、ユージオはまた斧を振る。きっと、みんなで楽しくご飯を食べる時間くらいはあるはずだ。と期待と不安を胸に抱いて斧を振る。

そして、大きくまた斧を振りかぶった時、日差しがサッと翳った。本能的に上を見上げれば、大きな影が空を飛んでいる。

鳥でもなく、飛行機でもない。最近目にしたソレは飛竜と呼ばれるもの。

「おい、キリト！今のは……」

全身が凍りつくような感覚にユージオは相棒の方を向いた。

あの飛竜の上には整合騎士が乗っていることだろう。そんな事実にたどり着いたユージオに、キリトも頷きながら返す。

「ああ、昨日の整合騎士だ」

その声は、深い恐怖で震えていた。

こんなにもはやくこの時が来てしまった。立ち尽くすばかりのユージオに、キリトもまた整合騎士を見つめる。

ルーリッドの村の方へ向かって行く整合騎士の目的は一つしかない。禁忌目録違反をしたアリスの連行だろう。神は最後の楽しい時間まで待たせてくれる気はないらしい。

しばらく、言葉を失った二人はようやく我に戻り、走り出す。

「まさか、アリスを……」
キリトが青い顔で呟いて、ユージオは顔を陰らせる。
知っていたことなのに、阻止できなかった自分にやはり腹が立って、弱さを呪うユージオ。
不思議と斧を持つ手に力が入って、どうしようもない怒りをギガスシダーへと打ち込む。そんなユージオに見向きもしないで、騎士の飛び去った方向を睨んでいたキリトは、短く叫んだ。
「行こう！」
ユージオの持っていた竜骨の斧をもぎ取って、走り出す。そんなキリトの背中を追いかけるようにユージオも地面を蹴る。
今までにないくらい、全力で足を動かし、駆け抜ける。空には既に飛竜の影はなく、どこに行ったのかはわからない。
でも、飛竜がこの街に降りたち、アリスを連れていくのが目的ならば、適所はあそこしかないはずだ。とユージオは思う。
「キリト！村の広場だ!!」
「っ！あぁ！分かった!!」
街道や畑のあちこちで、村人が空を見上げて立ち止まっていた。恐らく、初めて見る

整合騎士に気持ちが追いついていないのだろう。
そんな中でユージオとキリトは周りを気にすら余裕もないほど、必死に走った。
村の南門をくぐり、短い買い物通りを駆け抜け、小さな石橋を超えたところで、広場に出る。
集まっている村人が目の前にいるにもかかわらず、見えたソレに二人は足を止めた。
もしも、北の白い竜が生きていたらこんな感じだろうか。広場の半分を占領する飛竜は、教会の建物さえもほとんど隠している。あまりの大きさに気圧されそうだ。
そして、その竜の前に、一層眩く輝く白銀の騎士の姿があった。
見覚えがあるその姿は間違いなくあの黒い竜騎士を殺したあの整合騎士だ。
「あ、」
不意にユージオが声を上げた。
ユージオの視線の先には、籐籠を下げ持つアリスの姿があり、いつも通りの青いドレスに白いエプロンをみにまとい、大人たちの隙間から、じっと整合騎士の姿に見入っている。
二人は顔を見合わせて頷くと、体を屈めて移動し、どうにかアリスの方へとたどり着く。
「アリス…」

ユージオの呼ぶ声に、アリスは振り向くと驚き顔で何かを言おうと口を開くが、それをキリトがシーッとジェスチャーで表し黙らせ、囁く。
「アリス、静かに。今のうちに、ここから離れたほうがいい」
「え…なんで？」
自分の身に脅威が迫っているとは考えていないようで、意味がわからないと首をかしげるアリス。
「……あの整合騎士は、アリスを……」
ユージオが説明するべく口を開くが、一瞬の躊躇いに口を閉じる。
否、それは躊躇いではなかったのかもしれない。間違いなく、アリスを連れていくことを目的として来ていると分かっているユージオにとって、その邪魔をすることは前世で言う公務執行妨害である。
チクリと刺すような右眼の痛みが、ユージオを襲う。
「あ…お父様」
右眼を抑えながらも、ユージオはアリスのつぶやきを聞いて視線を上げた。
ルーリッドの現村長、ガスフト・ツーベルクが臆する様子もなく整合騎士の前まで進み出ている。そして、公理教会の作法に従って体の前で両手を組み、一礼をすると。
「ルーリッドの村長を務める、ツーベルクと申します」

とハリのある声で名乗った。
それに応じて整合騎士も初めて声を放つ。
「ノーランガラス北域を統括する公理教会整合騎士、デュソルバード・シンセシス・セブンである」
異質な響きを持つ声だった。大きくも小さくもない普通の声の大きさであるのにその響きは広場の隅々へと行き渡り、その場の村人全員を沈黙させる。
基本、ヘタレであるユージオはその声だけで、足がすくみ体から力が抜けていくのが分かった。
どうあがいても勝てない。本当に同じ人間なのか疑わしく思ってしまうほどの威圧が、雰囲気があの整合騎士にはある。
「ガスフト・ツーベルクの子、アリス・ツーベルクを禁忌条項抵触の咎により捕縛、連行し、審問ののち処刑する」
処刑だって!?
その整合騎士の言葉にユージオが目を見開いた。禁忌目録を破ることはとても重大な罪であることはユージオにも分かっている。
それでも、アリスは手先をほんの少しだけダークテリトリーに触れてしまっただけなのだ。こんなこと、まず日本ではあり得ないだろう。

「……騎士閣下、我が娘が、いったいどのような罪を犯したというのでしょう」
「禁忌目録第1章3節11項、ダークテリトリーへの侵入である」
その瞬間、今まで固唾を呑んでいた村人たちが大きくどよめいた。
そこでのユージオの行動はキリトよりも早く、ユージオはアリスの前に体を割り込ませ、村人の目から隠す。
本音を言うならば、アリスを連れて逃げたかったことだろう。しかし、ユージオは動けない。
どうしよう、どうしよう、と頭の中で不安が募る。
この世界に来て、ユージオには分かったことがあった。一つはこの世界の人は法を犯すことがないということ。二つは公理協会が絶対であり所謂モナーキー状態であること。つまり、ここで村長…つまりはアリスの父親に何かを期待することは無駄である。それがユージオの出した結論だ。
「……それでは、いま娘を呼びにやりますので、本人の口から事情を聞きたいと思います」
それでも親なのか。
そういった意味を込めてユージオは村長を睨む。
この世界では当たり前かもしれないが、それが分かっていても心地の良いことではな

い。

キリトとユージオはさらに密着してアリスを隠す。緊張からか汗がユージオの頬を伝っていった。

「その必要はない。アリス・ツーベルクはそこにいる。汝と、汝に命ずる……娘をここへ連れてくるのだ」

鎧を鳴らしながら右手を持ち上げ指をさした整合騎士は、まっすぐこちらを向いている。

ユージオの目の前で、さっと村人の列が割れて道ができた。指名された二人がその道を使ってゆっくりと歩み寄ってくる。

きっと、ここまでなのだ。と絶望も一緒に襲いかかってくるような感覚にユージオは目を閉じた。

肩に手を乗せられ、力任せに引き剥がされる。

「あっ……」

アリスの声が小さく聴こえた。

ガリッと唇を噛み、血が流れ出すのを気にする様子もなくユージオは自分の弱さを呪う。

アリスはそんなユージオを見て、大丈夫だと笑って見せた。こんな状況でも笑える強

さに目を奪われるユージオ。

「アリス…」

キリトが彼女の名を呼ぶ。

子供二人ではどうにもならない。整合騎士の前まで連れて行かれるアリスの背中をただ見つめる二人。

しかし、キリトが鋭く息を吸い込んでアリスの後を追いかけ始めた。それを見て、ユージオも動こうとしない足に鞭打って追いかけ始める。

まるで、死地に向かっていくような感覚がユージオにはあった。あの時(死ぬ時)と同じような光景を見ているような気がして、足取りが重くなっていく。

「村の長に命ずる。咎人を縛めよ」

整合騎士の命令により、拘束具を手にした村長が呆然と視線を落としたその時、ようやくキリトとユージオは騎士の前に到着した。

騎士の兜がゆっくり動き、正面から二人を捉えた。

遠くにいた時とは違う、胸を圧迫するような威圧に顔を歪め、ユージオは呼吸をするので精一杯の様子。

しかし、キリトは意を決したのか大きく息を吸い込むとはっきりとした声で叫んだ。

「騎士様!アリスは、ダークテリトリーになんか入っていません!片手を、ほんの少し地

面に触れさせただけなんだ!!それだけなんです!」
「それ以上どのような行為が必要であろうか」
冷徹な言葉。
興味がないと言いたげなその言葉に、ユージオは顔を上げた。ここで、僕は何をする。何をするために来てるんだ。何度も何度も自分に問いかけた。そして、キリトと同じく息を吸い込む。
「僕たちも…僕たちもその場にいました!!アリスだって転んじゃっただけで、侵入しようとして侵入したわけじゃない!!それでも連れていくのなら、僕もいく!」
「俺だって!!」
心から叫んだ。
運命に抗うべく、ユージオは顔を赤くして整合騎士に訴える。
だが、整合騎士は二人に見向きもしない。
その間にも、アリスの細い体に禍々しい拘束具が回されていく。三本の革帯を、肩、腹、腰にそれぞれ固く締め付ける。
もう、手立てはない。そう思った。これだけ訴えてダメなのならば仕方がないのではないか。そう強く思った。村人によって広場の中央まで引き戻され、そこで無理やりひざたずかされた状況で諦めかけるユージオに、しかしキリトはまだ諦めない。

「ユージオ……いいか、俺がこの斧で整合騎士に打ちかかる。数秒間は持ちこたえてみせるから、その隙にアリスを連れて逃げるんだ。南の麦畑に飛び込んで、畝の間から森に入ればそう簡単には見つからない」

一番、現実的なのかもしれない。

それでも、ユージオにはどうしてもキリトがあの整合騎士相手に数秒も持ちこたえることができるとは思えなかった。

そう、もう無理なのだ。何をしても手遅れで、この運命は変わらない。それでも、それでも――――――。

「……分かった、よ。キリト」

何かをしないと変えられないのではないか。

ユージオは前を見据えた。鎖に繋がれて痛そうに顔を歪ませるアリスに大丈夫だと笑って頷く。

ここで、整合騎士に反逆すれば自分達も咎人となることを分かっていてもなお、ユージオ達はその決意を変えることはない。

「よし、行くぞ」

キリトが斧を持って走り始めた瞬間に、ユージオもアリスへ向かって走り始め……ることはなかった。

ドクンと何かが疼き、ユージオの右目が激しい痛みとともに赤く染まる。〝Ｓｙｓｔｅｍ　Ａｌｅｒｔ　№８７１〟と映る右目は異常をきたしているようだった。

「こんな、もの」

焼けるような痛みがユージオを襲う。

足が動かない。禁忌目録を破ってはいけないと身体が叫ぶ。

「どう、して」

不意に力が抜けた。

それは禁忌目録を破ることをユージオ自身が辞めたと言うことでもある。倒れて行くユージオ。

その視線の先にあったのは、同じくなすすべも無く倒れて行くキリトがユージオの名を叫ぶ姿だった。